

園番号 603

## 令和6年度 奈良市立済美幼稚園 研究実践概要

園長名 中田 佐織

全園児数 17名

### 1. 研究主題

「心身ともに健やかで、主体的に活動する幼児の育成」

### 2. 研究年度

2年度

### 3. 研究主題設定理由

核家族化や少子化により、人との関わりがどうしても希薄化してしまう中で、子どもたちが一人一人個性を発揮しながら、互いを認め合い、思う存分にしたいことを見つけ、周りの環境（ひと・もの・こと）に主体的に、意欲的に関わろうとする子どもの育成を目指して本主題を設定した。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

なかまと共に、様々なひと・もの・こととの関わりや触れ合いを通して、体験や経験を積み重ね、豊かな心を育む。また、集団の中で自己発揮したり、子ども自らが主体的、意欲的に活動しようとしたりする中で、新たなことに挑戦したり、最後までやり遂げたりする力を育てる。

#### ②研究の重点

- ・研究主題について共通経験を図り、具体的な取り組みの方法や保育内容を検討する。
- ・生活や遊びの中で、直接的・具体的な体験や経験を通して、人とかかわる力や思考力、感性や表現する力を育み、生きぬく力の基礎を培う。
- ・遊びの中で十分に体を動かし、たくましい心と体をはぐくみ、自ら「やりたい」と取り組めるような保育と環境の工夫をする。
- ・少人数を生かし、個々の特性を認め合い、支え合える仲間づくりに取り組む。
- ・異年齢で交流できる機会を増やしたり、家庭・地域・小学校・保育園との連携を深めたりして、さまざまな環境や人とのかかわりを通して、多様な経験ができるように計画し、保育の充実を図る。

### ③活動の方法

#### <事例1>『泥が消えちゃったよ』

4歳児 6月

気候の良い日、泥んこ遊びの服に着替え、嬉しそうに裸足になって砂場にやってくる A 児と B 児。前日まで他の友達と一緒に大きな穴を掘って水をたくさん入れて海を作っていた経験を思い出し、「もっともっと〜」とスコップで穴を掘り、トイやそれを置くための台などを出してきて、自分なりに並べた。そして、「いくよ〜」と水を流しては、「たまってきた」「海に入ったよ〜」と二人で繰り返し流していた。しばらく楽しんでいると、A 児が「ひみつがあるんだ。いいことだよ。」とトイに泥を詰め始めた。泥がたくさん詰めると「いくよ〜！ばしゃーん」とそこに勢いよく水を流した。すると、「きゃー！爆発ー！（泥水）かかっちゃった！」と、泥水が跳ねたり、勢いよく流れ出したりする様子が楽しくてにこにこ顔を見合わせていた。何度も流していると「あはは。(泥)全部なくなっちゃたね」と、だんだん泥が溶け出すように流れてくする様子があった。その後、B 児が手に泥をためていると、A 児がそこにジャーっと水を流して「あはは！全部消えちゃったね」B児も「溶けちゃったかな」と、泥が水に流れてなくなることを二人で顔を見合わせ、笑いあいながら何度も繰り返し試していた。



#### 【反省・評価】

経験していたことを思い出して遊ぶ中で、いつの間にか“泥がなくなっていく”“消えちゃった”“溶けちゃった”という自分たちなりの楽しさを見つけ、感じたことを言葉や行動で表現し合いながら、一緒に遊ぶ楽しさを実感していると感じた。また、汚れてもよい服や裸足になることで、思い切り泥や水に触れて、感触を存分に味わうことができ、気持ちよさや心地よさを感じ、不思議さに気づき、「もっとやってみたい」と繰り返し取り組む意欲につながっていた。

自分たちだけの空間、時間を十分に確保でき、安心して遊びこむ中で、泥が水にゆっくりと流れることに魅力を感じ、「溶けちゃった」「消えちゃった」と素直に表現する姿を気の合う友達や保育者に認めてもらうことで、安心して自分の思いを表現する力を身につけていく姿に繋がると感じた。

#### <事例2>『“おはなしの世界”をつくろう』

5歳児 11月

一学期に「ロボットカミイ」や「ももいろのきりん」の続き話を聞いていた。9月のある日、少し大きめの段ボール箱を二つ見つけた C 児と D 児は、重ねてみてカミイをイメージした。「先生、カミイの絵本見せて」と、本物に近づくように作っていた。後日作品展について話し合った時「カミイがいるから、“ちびゾウ”を作ったらいいね」と、全員一致で決まり、段ボールと新聞紙を使ってゾウの丸い体を表現した。足は牛乳パックを使い「一



本じゃ、少しグラグラするよ」「じゃあ、重ねてみたら？」と試してみて、四本のパックをしっかりとくっつけることにした。「鼻は何を使う？」と保育者が投げかけた時、「トイレットペーパーの芯とか、ラップの芯？」と、みんなが考えていると、E児が「切り落とした牛乳パック、ほら広げたら丸くなるよ」と、みんなに見せた。「じゃあ、それを全部つなげたらいいんじゃない？」とF児がひらめき、残りのパックを広げて並べて、長さを確かめた。「ちょうどいいよ」と納得して、支えて持っている子、セロテープで止める子と役割を分担しながら長い鼻が出来上がった。その後はお話に登場したキリンやクマを考えを出し合って完成し、展示して大満足の子ども達だった。

#### 【反省・評価】

空き箱から、絵本に出てきたロボットを思い出して、友達と共通のイメージをもちながら仕上げる姿が見られた。出来上がったロボットを見て「本当にそっくりだね」と、保育者が感心したので、みんなが作品に注目した。本物に近いロボットの完成で、作品展に向けてクラスみんなが同じ思いをもって取り組むことができた。子どもたちの思いの実現に向けて素材と一緒に考えたり、準備したりしたことも意欲につながった。また活動の中で自分のアイデアを伝えたり、友達の考えに共感したりして、互いに認め合い協力して作品を作ることができた。

#### <事例3>『すごい！氷になってる！』

4・5歳児 2月

良く冷え込んだ日の朝、「ビオトープの氷が凍ってる」と気づいた子どもたちは「〇〇くん！ビオトープ凍ってるよ」「見に行こう」と誘い合ってその様子を見に行く姿があった。触れてみたり、棒でつついてみたりして「カチコチやな」「あ！割れた」と触れることを楽しんだり驚いたりしていると、用務員さんがビオトープの真ん中あたりの氷を取ってくれた。すると、「すごい分厚いな」「真ん中の方が分厚いねんて」「こっち（周り）の方が割れるね」と興奮気味に気づいたことを伝え合う姿があった。すると5歳児が「なんで凍ったのかな」「めっちゃ寒かったんや」「冷凍庫みたいなんやね」「カップに水入れといたら氷できるかな」「寒いところに置いておこう」と、様々な容器に水を入れて自分の考えたところに設置していた。次の日「凍ってる」「すごいな」と氷ができた様子に感動する姿があった。また、「こっちに置いといたのは凍ってないよ」「なんでかな」「ここはさむくなあったんかな」など置く場所によって凍り方が違うことにも気づき、伝えあっていた。4歳児も出来た氷を見せてもらっていると、「わたしもやってみたい」と次々と同じように取り組み始めた。その様子に気づいた5歳児が「こんな形のカップがいいよ」「ここに置いた方がよく（氷が）できたよ」と手取り足取り伝える姿があった。翌日、カップにできた氷に気づいて、「固まっている」「下まで全部凍ってる」「すごい」「よかったね」とみんなで喜び合っていた。



## 【反省・評価】

“ビオトープに氷ができてる”という発見から、みんなで気づきを共有したり、自然の中で氷ができていう不思議さを感じたりしていた。寒い中なら自分たちでも氷が作れるかなという思いをもって、一人一人が「どんなカップにしようか」「どこに置こうか」などを考えて試してみる姿になった。翌日氷ができていたことが成功したという喜びや、できていなかったものもあることのも不思議さもあり、容器を変えたり、置く場所を考えたり、思いを伝えあったりするという次の意欲につながった。4歳児もしてみたいという思いを伝え、5歳児もその思いを受け入れて一緒にしてみようとう優しくかかわることができた。一緒に成功した喜びを共有することができ、疑問に思ったことに対して試行錯誤することの楽しさや大切さを感じることもできた。

## 5. 研究の成果

少人数保育という限られた人的環境の中で、一人一人が持っている個性や良さを発揮し、互いにそれを認め合えるような仲間づくりができるよう取り組んできた。また、保育の中で異年齢での交流を多く設けることを意識してきたことで、4歳児は優しさを感じ、憧れの気持ちをもつことで「自分もやってみたい」という意欲や期待につながった。また5歳児は存在を認めてもらったり、自分の役割を果たしたりすることで、自覚の芽生えや自信につながった。

ひとつひとつの行事においても、子どもたちと共に考え、意欲的に参加できるように配慮し、職員や保護者、地域と連携を図りながら取り組んできたことで、経験を積み重ねる度にやり遂げる楽しさや心地よさを知り、次への意欲や自信に繋がってきたと感じる。また遊びを進めていく中で「こうしてみたい」「やってみたい」という思いが芽生え、友達や保育者と工夫し、子ども自らが積極的に取り組んだり、挑戦したりする姿につながった。

保育者や友達と一緒に様々な環境に触れ、たくさんの経験を積み重ねる中で、優しさや憧れの気持ちを持ち、安心して感じたことを言葉や体で表現したり、自主的、意欲的に物事に参加したり、様々なことに挑戦するなどの姿につながると感じる。

## 6. 今後の課題

今後も、少人数だからこそ一人一人が個性を発揮したり、互いの良さが認め合えるよう、遊びや活動の充実を図っていく。また、異年齢、家庭や地域、保幼小中等とのつながりを大切に考え、多くの環境と触れ合い、子どもの心に残る体験を積み重ね、心身ともに健やかでたくましい子どもの育成を目指し、保育内容の創意工夫に努めていきたい。